



湊の受難

公開健康診断、**恥辱**検査は蜜の味

公開健康診断、恥辱検査は蜜の味

「湊先生」

朝礼の終わり際、教頭に呼ばれた湊が首を傾げる。

「健康診断は受けましたか？」

「え？」

「今日までに提出するよう、ここに来た日にプリントを差し上げていたはずですが」

「あ！」

着任してから慌ただしかった湊はプリントを読んでいなかったことを思い出し、顔色を変える。

「まあまあ、それなら保健の内田先生にお願いしましょう」
校長が出した助け舟に湊がホツとした笑みを浮かべる。

「内田先生、いいですか？」

「ええ、それでは体育館をお借りしていいでしょうか？」
まるでマッドサイエンティストのように眼鏡をクイツとあげると、内田が口の端を釣り上げる。

「それでは先生方、生徒の引率をお願いいたします」
朝礼が終わり、内田が湊の方へ歩いてくる。

「それでは行きましょう」

「は、はい……」

事態を飲み込めないまま内田の後をついていくと本当に体育

館へと連れて行かれた。

「あ、内田先生、準備終わりましたよ」

生徒会役員が体育館にはいて、マイクやらモニターやらを準備していた。

「ああ、ありがとう」

そして生徒たちが次々に体育館へと入ってくる。

何が起きているのか分からず戸惑う湊をよそに生徒たちが床に腰を下ろす。

演劇部とダンス部が日頃練習で使う体育館のステージには照明があり、ピンクのスポットライトが頭上から灯り、さらに両サイドからもライトが舞台を照らし出す。